

「世尊寺行平」とは誰なのか

博物館調査員 切通 広貴
(人権史)

大谷大学博物館 2019 年度秋季企画展の展示作品の中に「二祖対面図」がある。「二祖対面図」は、中国浄土教の僧である善導と日本の浄土宗の宗祖である法然が、対面している様子を対幅に描いたものである。

法然の生涯を描いた絵巻であり、法然伝の集大成とも言われる知恩院（京都府）蔵『法然上人行状絵図（四十八巻伝）』巻七には、法然が夢の中で、川の向こう側から雲に乗ってやってくる善導と出会ったという場面が描かれているが、この場面をモチーフに描かれたものが「二祖対面図」なのである。

大谷大学博物館蔵「二祖対面図」の制作年代について齋藤望氏は、「書香」第 31 号で、「室町時代に遡ることは間違いありません」としたうえで、室町時代はかなり大量に制作されたと言われる「二祖対面図」の中でも、古例として注目されるとしている。「二祖対面図」のうち法然上人像の本紙上部には、「若我成佛／十方衆生／稱我名号／下至十聲／若不生者／不取正覺／彼佛今現／在世成佛／當知本誓／重願不虛／衆生稱念／必得往生」と、善導の『往生礼讃』からの引文が記されている。これは妙源寺（愛知県）蔵の「源空上人選撰付属御影」や檀王法林寺（京都府）蔵の「袋中筆二祖対面図」などにも記されており、法然の御影の讃文として代表的なものである。

ところで、その大谷大学博物館蔵「二祖対面図」の讃文の筆者について、木箱に同梱されている銘札には、「世尊寺行平讃善導大



「二祖対面図」

(左) 法然上人像 (右) 善導大師像
(大谷大学博物館蔵)

師・「世尊寺行平讃円光大師」と記されている。だが『尊卑分脈』などに載っている世尊寺系図の中に、「行平」という名は見当たらない。いったい「行平」とは誰であろうか。以下に銘札の内容を整理し、行平が誰かを探ろうと思う。「世尊寺」家とは、三蹟の一人である藤原行成（972～1028）を祖とする書流の家で、行成の完成させた和様書道を代々受け継いだ。8代行能（1179～？）の頃に藤原の中でも世尊寺の家名を名乗り、最後の17代行季（1476～1532）に至るまで、書壇の中心をなしたという。ゆえに、この室町時代に制作されたという「二祖対面図」の讃が、世尊寺の筆であっても、なんら不思議ではな

い。しかし、世尊寺家の中に「平」という字を使う人物は確認できないのである。とすると、銘札を書いた段階で何らかの誤りがあったということではないだろうか。

銘札では、法然のことを「円光大師」と記している。「円光大師」とは元禄10年(1697)に東山天皇から法然に贈られた諡号である。つまり、銘札は「二祖対面図」と同時代に記されたものではなく、元禄10年以後のものであることがわかる。同時代のものであれば、讚を書いた人をほぼ正確に伝えていたであろうが、少なくとも150年以上も後になって書かれたものであるならば話は別である。そこで系図などで名前が判明している世尊寺家の人物を、もう一度見直すと12代に世尊寺行尹(1286～1350)という人物が目にとまった。

なぜなら、行尹の「尹」の字と、行平の「平」の字は、くずして書くと大変よく似ているのである。これを踏まえて考えると、讚が書かれた当時、筆者が「行尹」であると示す文献があったが、くずし字で書かれていた文字を「行平」と間違えて読んで、銘札に書き記した可能性が浮かびあがってくる。もし銘札の筆者が「二祖対面図」を権威づけるために能書家であった世尊寺行尹の筆としたのであれば、世尊寺流の三筆と称される行尹の名を誤記するはずがないからである。

ところで、行尹を行平と読み間違えている例は他にもある。例えば、徳川美術

館(愛知県)蔵の「破来頓等絵巻」という絵巻物について、齋藤隆三『画題辞典』(新古画粹社、1919年)は、「絵は飛驒守惟久の筆、書は世尊寺行平の筆と伝へらる」としているが、金井紫雲編『東洋画題綜覧』(芸艸堂、1941年)では、「画の筆者は古来飛驒守惟久と伝へられ、詞書は世尊寺行尹といはれてゐる」としている。ゆえに読み間違った可能性が高いといえるのではないだろうか。ちなみに行尹は先述した『法然上人行状絵図』の詞書を書いた一人とも伝えられている。そうであれば、行尹が法然に関わる「二祖対面図」の讚を書くことも十分あり得よう。そこで国文学研究資料館(東京都)蔵「伝世尊寺行尹古筆切(山本家旧蔵古筆)」と比較してみると、「二祖対面図」讚文と書風が似ている。さらに国立歴史民俗博物館(千葉県)蔵の伝世尊寺行尹筆『古今和歌集』の巻数を表記した部分など、「十」の2画目にあたる縦棒の最後部分で、筆を止めずに、左手前にはらうという行尹に多くみられる特徴がある。これも、「二祖対面図」讚文の「十」と類似しているのである。

これらのことを踏まえると「世尊寺行平」は「世尊寺行尹」の読み間違いである可能性が非常に高いのである。そして「二祖対面図」の制作年代も、行尹が死去する貞和6年(1350)までに絞られることになる。もしそうであれば、大谷大学博物館蔵「二祖対面図」は掛幅形式の「二祖対面図」の中では最古級のものとなり、美術史上でも重要な史料になるのではないだろうか。



「二祖対面図」
銘札
(大谷大学博物館蔵)